松屋外集

巻一上

六十七冊

イ 5
1400
1

松屋外集序

有藏書之富者。未必有著述之才。有著述之才者。未必待藏書之富。今夫千金之子。目不知一丁。苟損資購書。則汗牛充棟之多。不難致也。一介之士。極乏典籍。而發憤著書。以垂於不朽者。亦或有之。然此特就其偏而言之耳。抑既負著述之才。資之以藏書之富。則所謂長袖善舞。多錢善賈者。

門 イ5 1400

復何如爲余向在鄉聞見甚狹而猶知江戸有小山田松屋者以該博鳴于世既而我水戸相公聞其名延之史館別局從事於考證之業已幾余亦從家於江戸曰始獲與之相識也往来談論質疑得益者数矣一日松屋齎其所述外集一帙而来謂曰吾之讀書所疑輒考所考輒錄歲月之久既盈百巻今新寫其二十巻以爲一帙子

其序之余辭不敏松屋不可遂留其帙而去松屋家世素封夙嗜典籍旁及異邦之書其所収蔵見有五萬巻於學莫不窺尤長於考證優於著述豈所謂既具其才又藏其書者非耶嗚呼斯道之湮晦也久矣有志之士孰不欲講究而發明焉顧学力何如耳以松屋之才讀松屋之書其施使之萬巻猶良將於兵多多益辦則其著

書圡言大論。說道義。高標持見識以之自伝自任。孰為以泰乎。今閲此書則大不然。專務網羅錯綜之力。不肯立奇偉非常之言。上自神祇　朝廷典礼制度之大。下至山川草木禽獸魚蟲之微。大抵根據古書。出入舊說。揭同異於上。折其衷於下。發端緒於前也。徵其類於後。蓋因在廣舊聞惠後學。而不在誇其博衒其能。然則何其

用心之謙且勤也。但其隨筆之體。不必拘次序。且蓋務博也。小大兼存。純駁並舉。斯蓋所以為分集。而覽者其或以之議焉。至於考證之精。引用之廣。則不啻不能容喙。向之議者。亦必將有資。蓋博以濟己說者。然則識此書者。不能遂無資於斯書。松屋不自誇其博。而松屋之功不可掩。松屋所自信任。蓋亦在此乎。余也一介寒士。性亦

極陋。才之與書。松屋兼有者。余則俱無。而
狂愚自伝。叨有志於斯道。則池日講究。發
明之力。安知登濟於斯業之博耶。於是乎
敢忘鹵莽。序而還之。天保甲午人日。常陸
藤田彪題。

源詮文書時年八十二[illegible]

讀松屋集
典籍網羅五
萬卷議論上

六三手年古
於学去太多
少許博如君

有幾人哉

以蕉尾書

松屋外集自叙

夫有鳥將来張羅而待之其得鳥者羅之一目也若以衆目為無用而製一目之羅則豈可得鳥乎被甲而備矢石若使人必知所中懸一札拒之而已事或不可前規物

或不可豫慮卒然不戒而至故君子畜道以待時利器以應用是所以予有群書捜索目錄之擧也其勞既三十年有未爲一日之用者焉其稿殆二千巻有未爲一事之助者焉可謂似羅之數目備於一

鳥甲之一札供於一矢石矣雖然一鳥可飽於口一札可代於命則豈爲無用之長物而唐捐乎凡人之情有愛惡焉愛之者不見可惡惡之者不見可愛矣予之於捜索目錄編集習與性成不覺筆倦故

不見可惡而見可愛積年之癖疾何異逐臭之夫乎近来雖以虚譽浮稱辱尊卑緇素之問然非内徳充而外應廣之謂矣素非寸拙劣甕牖固陋而閲捜目粗得析中之義偶徼幸之所致也其荅書之稿漸ニ為堆百有餘巻名之外集藏於文庫中云天保己亥花朝華頂殿倭學士平小山田與清採毫於江戸神田川上松屋窓下

門人間宮丱芳謹書

いかなるの人もつゆてはうたにぞ筆をとりつゝ家
てもえずとも御とおもひけれはまほしく又酒ひく
かのよはしきすきしなくも正しく清けれは
ましのはつひに有情こそさもさみす
よき人をも由へらは御しにはなくとにもなしは
初るまことをおもふ御心もひとかりし猿むつまも
まひのしもわしかくいぬしつもの御事しは
かの保かしやのきえつきてつひにしれくその

つゝもかし面へらせれましかも人くはなれぬ
倦き果かうしゆされたる○まそせよちとひ
きまむひまそ人なと携あるなしハこそきを
むらくつにならしいらむや猶ろすのしまさりし世
をやさしび此書乃つくり出しよ天の下にそてるらむ
いはしきもゆるされる物しまかりゆるさせまる
こゝろ人ありや乃と残餘りけつきとりの書る
天原にゆう志てともむ中本く就ては底津石根

かゝることもなし宮柱ふとしきたてしちよの屋の
雅書の名さへ流れもゆくなかつきのまたおほ
をそてうれ数をへてなし六十にあまる余り
まかしはしまつきまあとまりまめしいされかも
巻の一の為乃かきてかれかりかへて案じ
ゆゝもにをはひつゆし折つものゝ後の世にも
うきくへもしゆきぬれはまするもしるへ庵
うてにまゝへまかひの筆にてかきいれ故實を

ひ有職とふみまなひをもはらとしめのゑのこを
まて先つころの人りて寶とせしも今はあらため
ゆゑの度なるはかしこうかくてふるき跡
ほのかにしるし人はまつ松の下枝のいさゝか
うつれ落葉をひろひ試て幸はひにいかなる
ふてにしるせいとやかのまことをつみて委ねちて
ひもの松つひもれてひろひ学ひてそのもたる
むかしもなほさまて藹のはこしみもとをつくひ

かなふいまた先ぶ雅書の世になかなかきこにありて
ゆくびくをつひ爲乃媚しみかなひて竹芝の
浦にれ浪のかく静なる秋の夕ぐれ松にもたつ
このもの音よ浮世流ちり拂ひそくこゝに緑山の
学ひの窓 北渓乃主心室よ筆をとる
天保十四年なつきくにつくりつゝこの五日なる主獻

松屋外集巻之一

目録

○第一神（カミ）の名義

○神（カミ）卅初生（ハジマリ）　○加（カ）微（ミ）を加（カ）牟（ム）といふ例

○長官（カミ）　○次官（スケ）　○判官（ジヤウ）　○主典（サクワン）

○動植器物等に神（カミ）といふ例

○自（ミヅカラ）大神（オホカミ）と称（ナノル）　○父（チヽ）を神（カミ）といふ

○天皇御自神と詔たまふ ○君の名義
○君ハ褒誉鍾愛の詞 ○下輩に君とよふ
○遊女を君といふ ○あが君 ○吾藝
○吾兒 ○人を貴て公といひ人を賢にして
○君と稱ふ ○器財動植類に君といふ
○月を君といふ ○君と神と通ふ例
○高津神 ○天狗は天公

○諸國高名ある天狗 ○飯縄権現
○狐神 ○大天狗小天狗像の説
○憂流迦 ○天狗の名目
○天狗熱鉄を呑 ○天狗をよめる歌
○倶濱 ○天狗祭 ○天狗假面
○王の鼻

○第二鎗棓雉刀考

○都留伎多知の名義　○片刄両刄の説

○柏釼　○都牟刈之大刀

○頭推之大刀　○頭椎　○石椎

○神度釼　○多知加多奈都留伎の差別

○刀の名義

○釼大刀に長柄を付たるを矛

○刀に長柄を付たるハ薙刀　○矛の名義

○木矛　○金矛　○兵仗の矛

○儀仗の矛　○棒　○杖　○白杖

○白梃　○白棒　○打志らぐるやと云詞

○鉄棒　○木棒　○佐以棒　○佐以杖

○鉄杖　○車輻　○金吾　○五色棒

○ちぎり木　○棓　○金木　○笞

○チツテイ　○檛箠　○鉄檛鉄鞭

○鉾の名目　○振鉾　○鑓の始
○鑓の名目　○鑓奉行　○鑓持
○竹鑓　○薙刀の名義　○薙刀并始
○薙刀の名目　○木長刀　○打物
○長刀并寸法　○長刀持　○漢土の槊
○鎗類の名目　○漢土の棒類の名目
○漢土并長刀類の名目
○長脚鑽一名

琴柱一名叉　○鉄把　○狼牙棒ひわつ
○儀仗の鎗打物の類　○挟箱　○挟竹
○表ざし袋　○道具并者　○櫜鞬
○儀従

松屋外集巻之一

華頂殿亞老平小山田與清著
平戸藩士源年田部寛德校

第一神乃名義

古事記上巻。天地初發之時。於高天原成神名。天之御中主神。次高御産巣日神。次神産巣日神。此三柱神者。並獨神成坐而。隱身也。次國稚如浮脂而久羅

下那洲多陀用幣流之時如葦牙因萌騰之物而成神名宇麻志阿斯訶備比古遲神次天之常立神此二柱神亦獨神成坐而隱身也上件五柱神者別天神次成神名國之常立神次豊雲野神此二柱神亦獨神成坐而隱身也次成神名宇比地迩神次妹須比智迩神次角杙神次妹活杙神次意富斗能地神次妹大斗乃辨神次淤母陀琉神次妹阿夜訶志古

泥神次伊邪那岐神次妹伊邪那美神上件自國之常立神以下伊邪那美神以前并稱神代七代上二柱獨神各云一代次雙十神各合二神云一代也云云神代紀上巻云開闢之初洲壤浮漂譬猶游魚之浮水上也于時天地之中生一物狀如葦牙便化為神號國常立尊次國狹槌尊次豊斟渟尊凡三神矣乾道獨化所以成此純男次有神埿土煑尊沙土煑尊亦曰埿土根尊沙土根尊次有神大

戸之道尊、大苫邉尊、一云、大戸之邉、亦曰大戸摩彦尊、大戸摩姫尊、亦曰大冨道尊、大冨邉尊。次有神面足尊、惶根尊、亦曰吾屋惶根尊、亦曰吾忌橿城尊、亦曰青橿城根尊、亦曰吾屋橿城尊。次有神伊奘諾尊、伊奘冊尊、凡八神矣、乾坤之道相參而化、所以成此男女、自國常立尊、迄伊奘諾尊伊奘冊尊、是謂神世七代者矣云云、一書曰、天地初判、一物在於虚中、狀貌難言、其中自有化生之神、號國常立尊云云、一書曰、古國稚地稚之時、譬猶浮膏而漂蕩、于時國中生物、狀如葦牙之抽出也、因此有化生之神、號可美葦牙彦舅尊、次國常立尊、次國挟槌尊云云、一書曰、天地混成之時、始有神人焉、號可美葦牙彦舅尊、次國底立尊云云、又曰、高天原所生神名曰天御中主尊、次高皇産靈尊、次神皇産靈尊云云、一書曰、天地未生之時、譬猶海上浮雲無所根係、其中生一物、如葦牙之初生埿中也、便

松屋外集一

化爲人號國常立尊云云、一書曰、天地初判有物若
葦牙生於空中因此化神號天常立尊次可美葦牙
彦舅尊、又曰有物若浮膏生於空中因此化神號國
常立尊云云、古事記序に、夫混元既凝、氣象未效、無
名無爲誰知其形然乾坤初分參神作造化之首陰
陽斯開二靈爲群品之祖云云、同書上巻八千矛神の
歌に、夜知冨許能迦微能美許登波云云、神功紀十三

年皇大后歌に、區之能伽彌等壺豫珥伊麻輸、伊破
多々須周玖那弥伽未能云云、これらの書に據て、伽微
神の初生、及伽微と云る辭の古例を證べし、伽微
通音に加牟とも云り、古事記上巻に、伊邪那岐命告桃
子、賜名號意富加牟豆美命云云、又中巻神武御歌
に、加牟加是能伊勢能宇美能云云、神武紀同、神功紀十三
年皇大后歌に、訶武保枳保枳玖流保之云云の類

おほよそ首を加宇倍、亞をカウナギ、などいふもいと後の音便なるも、然て神之為言上にて上とあるもみな崇敬よりの名也。尊にも剛にも弱にも、其物を稱揚して、其物を恐怖していふと知べし。倭名抄職官部に、長官、神祇曰伯、省曰卿、弾正曰尹、勘解由使曰長官、鑄銭司同、勘解由使職曰大夫、寮曰頭、司曰正、主膳監同、内膳司曰奉膳、今案令有奉膳二人、後停奉膳一人為正、署曰首、近衛府曰大將、兵衛衛門等

四府曰督、内侍司曰尚侍、大宰府曰帥、鎮守府曰將軍、國曰守、郡曰大領、家曰令、以上皆加美云云。此外院廳の執事、記録所の上卿などもみな加美也。かく長官を加美といふなる上につぎて次官須介也。神武紀歌に宇介譬餓等茂、伊莽輸開珥虚祢、倭名抄造作具に、唐韻云、楷桂、支屋歓也、今按和名須介、などあるも須介はおなじく副助るヿいふ辭也。大少副、大少輔、大少弼、亮、助、中少將、佐、典侍、大少貳、介、大少領、扶、など皆須介にて、加美に副助る官なれバなり。判官、万豆利古止比止也、加美須介の次に有て其司中の政を執行者なれバ

政人の人を省て、音にジヤウとよぶ。司によりてハングワンとも、ハウグワンともよべり。祐、丞、忠、進、允、佑、典膳、将監、尉、掌侍、監、軍監、掾、主政、従、など皆ジヤウなり。今世、組頭、元締などいふもおなじ。佐官、史、録、主典、属、令史、将曹、志、典、軍曹、目、主帳、書史、など皆サクワンなり。今俗書役といふにおなをハじめん、下風の官、皆上首とし祇承されバ也。日本霊異記中巻第廿七縁に、國守を國上（舊本今）昔物語廿六巻五語に、陸奥守を上、同廿八巻卅語に、左京大夫を官の上など書るをもおもふべし。

神代紀上巻に、素戔嗚尊教蛇曰、汝是可畏之神、敢不饗乎云云。おほ蛇を指て神とかきたまへり。欽明紀前紀に、秦大津父者、中略山逢二狼相闘汚血、乃下馬洗漱口手祈請曰、汝是貴神云云。萬葉集八の巻に、大口能真神之原云云。また十三の巻に、大口乃真神之原従云云。冠辞考に、おほ狼の事にて、より猛き獣なれバ、畏て真神といひならひ、且かれが口は殊に大にしあれば、おほ口の真神の原とはいひかけたり、といへり。已上ハ狼に神といへるなり。　欽明紀六年に、膳臣

巳提便使于百濟(中畧)有虎連跡(中畧)雖汝威神愛子一也云云、萬葉集の十六の巻に、韓國乃虎云神乎生取尓云云、巳上ハ虎を神といへる也、推古紀十九年に、豹尾をナカツカミノヲ、天武紀朱鳥元年に、虎豹皮をナカツカミノカハ、など訓るも、まさしく虎豹を神と為といひたるなり、後漢書東夷傳濊の条に、祠虎以為神云云、魏志東夷傳濊の条に、以祭虎以為神云云とそ見ゆ、又皇極紀三年に、東國不盡河邊人大生部多勸祭虫於村里之人曰此者常世神也(中畧)葛野秦造河勝悪民所惑打大生部多其

巫覡等恐休其勸祭時人便作歌曰禹都麻佐波柯微騰母柯微騰枳舉曳倶屢騰擧預能柯微乎宇智岐多麻須母、此虫者常生橘樹或生於蔓椒(蔓椒此云裒曽紀)其長四寸餘其大如頭指許其色緑而有黒點其貌全似養蚕云云、これハ虫を神といふ、古事記上巻に、其御頸珠名謂御倉板擧之神云云、此ハ珠を神と称せるなり、又同巻桃をも神としるし、既に前に引たり、かく蛇虎狼なども神と

稱する忌しきま上たる物と好言崇讚にて、今俗雷をも常ハカミナリといふぞ、其鳴いとくきはすれ、雷樣と尊稱するぞかし。橘の虫をバ靈妙なるよしにて神といひ、桃や玉を褒て神とぞいへるなり。又自尊大に稱するをもあり。神代紀下巻に吾名是猨田彥大神云云。古事記の雄略段に吾先為名告吾者雖惡事而一言雖善事而一言言離之神葛城之一言主之大

神者也云云。雄略紀にも見ゆ 此外所見おほし。同記上巻に速須佐之男命、亦問賜之汝等者誰故其老夫答言僕者國神大山津見神之子焉僕名謂足名椎妻名謂手名椎云云。ぞあるなど、已が父を神と稱るなり。又天皇も自神と宣ことありて、雄略紀御歌に加微能美氐母知、御自の御手をのたまへるなり。古事記雄略の段に見ゆ。と詠たまへる類擧るに遑なし。○君も神の通音にて上とあ

る人といふ心にておなじ、日本紀に、君、主、王、皇、天、帝、公、侯、君王、人主、皇帝、乗輿、車駕、陛下、王者、などの字を支美と訓、歌にも同紀に、企彌我誉贈比、（神代下）嗟用迺虚烏那羅倍務耆瀰、（仁徳廿二年）枳弥波夜那祇、（推古廿一年）枳瀰我梅餓姑褒之枳、（齊明七年）古事記に、岐美何余曾比、（上巻）斗比斯岐美波母、（景行の段）岐美加由岐氣那賀久那理奴、（允恭の段）など見由、又意富岐美（古事記景行の段、仁徳の

段、清寧の段、日本紀仁徳五十年、允恭廿四年、雄略五年、同十二年、武烈十一年、継体七年、推古廿年、）麿弊菟著瀰、（景行紀十七年）ともよめり、此等の詞、萬葉集に見えたるハ枚挙にいとまあらず、さて是を褒誉鍾愛の詞に用て、己より下ざまの人にもいへるは、萬葉一の巻（廿九丁右）太上天皇御歌に、君之當者、（こは御子達を指てのたまひしなり）同二の巻（十三丁右）大伯皇女歌に、如何君之、（御弟の大津皇子をのたまひしなり）同巻（四十二丁右左）人麿歌に、荒床自伏君之家知

者云云、また奈世流君香聞、（此二は狭岑島の死人を指てよまれしなり）
同三の巻（五十一丁）大伴三中歌に茵花香君之云云、ま
た往公鴨、（此は判官大伴三中が下輩の史生文部龍麿を指ていへるなり）古今春
上、光孝天皇御歌に、君がため春の野に出て若
菜つむ、（臣下にのたまへり）後撰恋下、左大臣歌に、君がため
さふたよるぞ、（下輩の女房にいふ）拾遺雑春、具平親王歌に、
君がふかひのなでしさふ、（下輩の公任朝臣にいふ）伊勢物語業

平母歌に、見まくほしき君、（子にいへる、業平家集にも出）後拾遺、
恋三、祭主輔親歌に、君もたづ枝の、（はうまつて人にいへる）
空穂、藤原君に、君にしきてゆれ、（宰相の君が女房の兵衛の君）
にいつる詞に（下輩を指）源氏空蝉に、中将の君もいだくに
ぞ、（空蝉君がはうまつる人を指ていへる之）枕草紙春曙本二の（巻十二丁右）に、女
房のはかねなる人さへあればおもと、君などいへば、
見えつるのふうれしとおもひて、（下輩を指ていふ）などいふ

おもへる字ぞ今ハおもひ出たるまゝひとつふたつ得て字
あぐ八雲御抄一の巻十六丁右に上の御事を君とまう
次ハはでゝなし其人字君といへる是古今の教訓
なりと記したまへるをとりうけ引奉てこのまし上下親
疎男女僧尼にいたるまで古より親愛尊稱に用る
詞にて殊に戀歌にも尊卑相親しく君とよみたる
例數ありて遊女をも君といふも親愛の意なる

ごし。又人の心などにてあが君といふよし。源氏夕貞
に。あが君はいづくにまへ云々。紅葉賀に。女あが
君しとむかひて手をとるヿ云々。狭衣二に。於
あが君おぼ侍るきさまゝりてあさきを給ふなよ
云々。又あが君しさるこゝと給ふれ云々。又あが
これみ於此文ちらさむことなこれみかれそとよ云
云。同三に。此手ぞてさみあが君しとゆめだまへ
云々。落窪二に。あが君し。よさわぶまうさき給み
せ給へ云々。此外所見おほかめり。崇神紀十年に。知て
不得免叩頭曰我君云云。号叩頭之處曰我君とあ
るをおもへば我君は神名帳山城國相樂郡和伎坐天
乃夫支賣神社こもなり。思ひ誤りて親愛の辭乃吾藝を古事記仲哀の

段恐熊王歌に伊奢阿藝云々應神の段に天皇詔佐邪岐阿藝之言云々神功紀攝政元年に伊弉阿藝伊佐智須區祢云々應神紀十一年に伊弉阿藝奴珥比蘆菟弥珥などみゆ。吾君ぞといふは古事記傳卅六、日本紀歌解、槻の落葉上。ひがごとなり。應神紀に伊弉阿藝とあるを古事記には伊邪古杼母とあるにても吾藝ハ吾兒なること知べし。神武紀御歌に阿誤豫阿誤豫云々。又伊莽儴而毛阿誤豫、伊莽儴而毛阿誤豫云々。万葉集九に、吾思吾子云々。同十三に、道饗文吾子云々。同十九に、此吾子韓國邊遣云々。空穂俊蔭に、などあごなる此は乳呑ぬぞ云々。又あごのみま

せん方にもいづちへもくそのさらむ云々。又あご一人をおく出ても、あるとある宮ゐびと、あづかんなく道ひあゆのむに、しらぬ人なく皆ありなん。あごをかくみおきて、われもいのちのうへあるまじ云々。又あでもそこなに寐よ。御ぶくにのむ云々。源氏帚木に、あごハあつかれ云々。又さりともあごもこの子にてをあれよ云々。又よしあごだになくてそのさまひく云々。同空蝉に、あごハらうらけきど云々。同須磨に、あごの御次くせかく云々。同東屋に、亦ごハ思ひおとしたまへり云々。同夢浮橋に、あるおうちふし妹のこのかハおぼゆや云々。此外これら所見あれど、ことごとくもしくれバ引出ず。漢文にも、史記申屠嘉傳に、文帝謝丞相曰此吾弄臣君釋之云云。又公孫弘傳に、天子報曰

惟所與共為治者君宜知之蓋君子善善惡惡君宜
知之君若謹行常在朕躬君不幸罹霜露之病何恙
不已延上書歸侯乞骸骨是章朕之不德也今事少
間君其省思慮云云漢書韓王信傳に上賜信書責
讓之曰專死不勇專生不任寇攻馬邑君王力不足
以堅守乎安危存亡之地此二者朕所以責於君王
云云魏志杜畿傳注に魏略曰文帝問畿前君所送

何少今何多也云云蜀志諸葛亮傳に先主謂亮曰
君才十倍曹丕必能安國終定大事若嗣子可輔輔
之如其不才君可自取云云晉書杜預傳に帝從百
僚臨會舉觴屬預曰非君此橋不成云云容齋隨筆
十五の巻呼君為爾汝条に東坡云凡人相與號呼者貴
之則曰公賢之曰君云云品字箋新聲第七君字注
小說文尊也臣民之所共尊也白虎通群也卒土之

所群戴也又夫人稱小君者以其職理陰教亦臣民所共尊也又易家人有嚴君焉父母之謂也又百體稟命一心為夫君妻妾尊夫曰夫君東方朔謂婦為細君云云日知録の廿四巻君の条不古時有人臣而隆其稱曰君者周公若曰君奭是也篇中言君奭者四但言君者六而成王之書王若曰君陳穆王之書王若曰嗚呼君牙皆此例也猶漢時人主稱丞相為君

侯也漢書兒寛為御史大夫奉觴上壽制曰敬舉君之觴禮記坊記云大夫不稱君恐民之惑也故春秋傳中稱君者皆國君然亦有卿大夫而稱為君者荘十一年楚鬬廉語屈瑕曰君次于郊郢以禦四邑襄二十五年鄭子産對晋士荘伯曰成公播蕩又我之自入君所知也文十年楚范巫矞似謂成王與子玉子西曰三君皆将強死并二臣通謂之君至家臣則直謂其主曰君昭十四年司徒老祁慮癸謂南蒯曰羣臣不忘其

君二十八年晉郤盈之臣曰慭使吾君聞勝與臧之死也以為快哀十四年宋司馬命其徒攻桓氏其父兄故臣曰不可其新臣曰從吾君之命是也猶鄭伯有之臣稱伯有為吾公儀禮喪服篇公士大夫之衆臣為其君布帶繩屨傳曰君謂有地者也鄭氏曰天子諸侯及卿大夫有地者皆曰君晉語三世仕家君之再世以下主之喪大記大夫君孔氏曰大夫之臣稱大夫為君周禮調人註主大夫

君也此則上下之通稱不始於後代矣人臣稱君自三代以前有之孟子象曰謨蓋都君漢書高帝紀爵或人君上所尊禮師古曰爵高有國邑者則自君其人故曰人君也上謂天子漢時曹椽皆稱其府主為君至蒼頭亦得稱其主人為君後漢書李善傳君夫人善在此是也女亦得稱其父為君漢書王章傳我君素剛先死者必我君是也婦亦得稱其舅為君爾

雅姑舅在則曰君舅君姑沒則曰先舅先姑淮南子君公知其盜也逐而去之列女傳我無樊衛二姫之行故君以責我是也喪服妾為君鄭氏註曰妾謂夫為君者不得體之加尊之也雖士亦然云云○字通君字注ヿ又夫稱婦曰君東方朔上賜食已懷其肉曰歸遺細君又同輩彼此相稱曰君曰使君荀爽為李膺御喜曰今日得御李君矣耿況謂寇恂曰使

君建節銜命以臨四方又朝廷辟召或去或就皆曰徵君聘君又循吏民心畏愛者稱之神君云云又凡動植之物稱君北齊後主號鷹曰凌霄君晉史王子猷愛竹曰此君韓愈毛穎傳管城子累拜中書呼為中書君酉陽雜俎稱鼠為社君云云白氏文集十の巻九丁栽松詩ヿ愛君抱晩節憐君含直文欲得朝々見堦前故種君知君死則已不死會凌霄云云 此ハ松を指て

君といへる之　李太白集補註八の巻　峨眉山月歌ニ思君不見下渝州云云。これも月を君といへりて、すへて上下相通じて君といへることおほし。萬葉集五の巻十六丁左　壹岐守板氏安麻呂歌ニ波流奈例婆宇倍母佐枳多流烏梅能波奈岐美乎於母布得用伊母祢奈久ニとよめるハ梅を君といへるなり。また　廿巻五十五丁右　大伴家持歌ニ安之比奇能夜都乎乃都婆吉都良都良尓美等母安加

米也宇恵弖家流伎美とあるを椿を君とよみたるなり。また君上なども通例なり。博物志二の巻二丁右　外國の条に房風之神二臣以塗山之戮見禹使怒而射之云云。防風之君を房風之神と書きたり。房風品字箋新聲第七論諧神字注に、人之出于類者亦得以神稱国語禹會群神于會稽之山註群神各國之君也君主山川亦得以神稱之云云。按に今本の國語魯語下の文与此異也。また創聲第三十仗

諧上字注ニ高也尊也貴也下之對也云云。又稱君者不敢直言其君而稱上云云。國語齊語注ニ上君長也云云。蔡邕獨断ニ漢天子正號曰皇帝云云。史官記事曰上云云。また上者尊位所在也。太史令司馬遷記事當言帝則依違但言上不敢渫瀆言尊号尊王之義也云云。漢書宣帝紀注ニ師古曰上者天子自謂也云云。此上も君ニ通へる詞也 家語五帝徳篇ニ寧我

曰請問禹。孔子曰云云。其功為百神之主云云。此百神ハ百君の義也。此外ふる書にもあれども。まづ大祓ニ高津神乃災とあるハ天狗の災也。高ハ天ニ同じよし古事記傳三の巻ニ高天原。高光。高御座。高行や隼などいふ詞字擧て證して。津ハ助辞也。神ハ例の公の通語也。天公と書るも天神よみにおぼしめしたるにや。狗も公と同音の字なれバ借用しにて延喜字

信訓ナリハ字書
字ニ加フベキ歟

延木叅議ト叅木三木なとゝ書類也、天狗星ト引て説んとするはいみじき誤也、台記久壽二年八月廿七日の条ニ親隆朝臣来語曰所以法皇悪禅閤及殿下余者先帝崩後人寄帝巫口先年人為詛朕打釘於愛宕護山天公像目故朕目不明遂以早世法皇聞召其事使人見件像既有其釘即召愛宕護山住僧問之仰申云五六年之前有夜中□□□□□□□美福門院及關

白疑入道及左大臣所為法皇悪之雖難取信天下道俗所申如此先日成隆朝臣畧語此事今聞両人説怖畏不少但禅閤及余唯知愛宕護山天公飛行未知愛宕護山有天公像何況祈請乎蒼天在上白日照怖々云云此天公ト愛宕護山縁起山城名勝志九の巻ニ所引ニ有大杉弥天幡地天竺大夫日良唐土大夫善界日本太郎坊太郎坊一名榮術太郎各将其眷属現于大

杦之上有九億四萬餘天狗神頭鬼面被毛戴角とある天狗にあたる天公の字聽てタカツカミと訓ぜし、塩嚢抄八の巻にみえ日本紀ニ八天狗ト書テアマグツ子トヨメリ、とあれど、日本紀なる天狗星の事にて、天公にあらず、漢書王莽傳下に、吾天公使也、天公使我告亭長曰云云、晋書五行志の百姓謡に、天公誅譴汝云云、同書成恭杜皇后傳に、

傳言天公織女死為之著服至是而后崩云云とみえ雷公などし神といふすぢを公といへるまゝく、倭漢その例おほかるを、然て愛宕山のきやうくわう坊、田村草子太郎坊、愛宕山白雲寺縁起、源平盛衰記八、太平記廿七、後太平記十七、同四十一、應仁略記下、未来記、草子、胡蝶草子、御曹司島渡草子、富樫草子、善界謡詞、北條五代記七、宍戸司箭後太平記四十一榮術太郎、愛宕縁起東山の三郎坊、田村草子鞍馬の僧正坊、六名は魔王大僧正坊後太平記十七、同四十一、大

天狗、小天狗、胡蝶、草子、鞍馬天狗、謡詞、木葉坊、後太平記四十一鳴瀧山の胴一法印、後太平記十七大和葛城の大天狗、葛城天狗、謡詞遠江秋葉山の三尺坊和漢三才圖會六十九駿河の富士太郎鞍馬天狗、謡詞甲斐身延山の妙太郎、妙次郎、挫日蓮相模大山乃大天狗、小天狗、倭漢三才圖會六十七最乗寺の道了権現、北條五代記、片假名本、三、東遊行嚢抄十三、近江比良山の次郎坊、冨樫、草子、胡蝶、草子、後太平記、十七、同四十一、類聚名物考、神祇、六、上野妙喜山の法性

坊上野國志、甘羅郡部中之嶽の長清法印、同上新田大光院の呑龍上人、上野國志、新田郡部赤木山の杦之坊新著聞集、六信濃乃飯縄三郎、鞍馬天狗、謡詞に見ゆ、飯縄は伊縄ともかけり、信州戸隠の近辺に、伊縄山ありて、本宮、里の宮、二處其間一里許隔たり、御手洗とて一之倉池といへり、縦五町、横三町許なり、中に島あり、此池の沙を飯沙といふ、飯のごとき白粒なり、其味麦飯に隣く、食ふべし、されば飯沙よりおこる地名なり、イズナを通はし、イツナといふは、杯なりけるをスキといふ類也、此神社の事、越遊行嚢抄、五の巻に見ゆ、社傳に祭神ハ保食神といへり、梅村載筆、倭訓栞三の巻などに、飯綱の法

ハ狐を祭るゆゑに、陀吉尼天の邪法とはいへり。されど鞍馬天狗、謡詞に、諸國の天狗を挙たる中、飯綱三郎富士太郎、とあれバ、狐を祭れりといふ説ハいかゞあらん、またいふ、武蔵國の髙尾山相模國の波須計山、中澤山などいふ、飯綱權現の大社ありて、いづれも祭神ハ天狗なりといふ。陸奥仙臺、飯縄山、越前、日永、嶽などにも、此神を祭れるよし、倭訓栞三の巻にいへり。狐を祭れるハ、續古事談、二ノ臣節ノ条ニ、古、野干ヲ神ノ体トナシタル社ノホトリニテ、狐ヲ射タル者アリケリ。此者トガアリナシノ事、陣ノ定ニ及テ、諸卿サマぐニ申ケルト云々。小右記、長元四年八月四日の条に、齋王御聲猛高、無可喩事、御託宣云、寮頭相通不無〇妻、六狂乱、造立宝小倉、申内宮外宮御在所、招集雑人、連日連夜、神楽狂舞、京洛之中、巫覡祭狐、定、太

神宮、如此事、不然之事也云々。壒嚢抄一の巻五十七段に、狐ヲ祝フ社、女神ニテマシマセバ、女官ニ准ジテ命婦ト云ヲ、呉音ニミヤウブト申セルニヤ。又元来其名アル神ノ使者ナレバ云歟云々。類聚神祇本源十の巻に、大田命傳曰、素盞烏尊子宇賀之御魂神、亦專女三狐神云々。同十一の巻に、大田命傳神記曰、宇賀能美多麻神云々。亦神服殿祝祭三狐神同座神也。故亦名專女神也。齋王專女、此縁也云々。此神祇本源の二説、元々集六の巻、御倉神の条、同七の巻、調御倉神の条にも引たり。三狐ハミケツとも訓ずれば、もと借字なりけむに、三狐のもじよみ誤て狐神の事なりし、專女とふ名さへいひ出けるにや。新猿楽に、野干坂之伊賀專女もありて、狐ハ女に化て人を誑るゆゑなる名

おなじとなん、又狐を仕といふぞ、康富記應永廿七年八月十日の条に、今朝室町殿、医師高天、被禁獄、父子弟等三人也云々、此间仕狐之沙汰風聞、然而昨日於御臺御方、仰験者被加持之處、二疋自御所逃出、則被縛伴狐之後、被打殺、依此事高天が狐ヲ奉詛付之条露顕云々、仍テ今朝被召取云々、晝程又被召陰陽頭定棟朝臣是仕狐之由、有虚説、末代之作浅间敷々々々云々、同十月九日の条に、後聞、因人高天、昨日被流讃岐國、後経朝臣同國被流之、但先後経朝臣、於秋野道場出家云々、是等皆狐仕之輩也とみゆ、榮花物語疑の巻の御堂関白道長公の御病悩にも、僧どもの狐付たるかなとあり、伊勢貞丈後院随筆下巻にあげつらひたまき、伯耆大山の伯耆坊一名を大山坊、鞍馬天狗謠詞、後太平記四十一、周防右田嶽碧雲寺の胴一法印、後太平記卅一安藝嚴島の三鬼天狗、後太平記十七、同卅三ニ處、同卅七、西遊雑記一、讃岐白峰の相模坊、鞍馬天狗謠詞豊前彦山の豊前坊、鞍馬天狗謠詞、後太平記十七、同四十一、西遊雑記二、筑前竃門山乃寳満天狗、西遊雑記七、などの類、いづれも虚空飛行の天公にて其像も神代紀の猿田彦大神のさまをまねび、小天狗ハ次にしさまをとりて、金翅鳥王などその金翅鳥王の像たり、尊

容抄、佛像圖彙、おもひよせ、作て設しにや、源平盛
なども見ゆ、
衰記八巻廿丁右法皇三井灌頂の条に尾の憍慢天狗、
法師の憍慢天狗男の憍慢天狗、女の憍慢天狗、な
どの姿形の事をいひたれバ考べし、海内奇観四の巻
呉山圖説龍池の条に、三僧雨を祈居に雲上に法
師ありて大瓠より水をそゝぐさまあり、外に三
神ありて皆雨を降らすわざをなせるさまなり、

その中一神は此土の小天狗のごとく觜あり、雨
翼あり、手は鍬やうの物をもちたり、さては小天狗
をはやく唐土にて作出る像にや、正法念経第十
九に、憂流迦翻云天狗まさ第四十大天狗などみえたるは
光物にて、本朝の天狗とは殊なり、天狗は空穂、俊蔭二處、榮
花、根合、同布引、瀧に二處、今取之ばやの中巻、大鏡、
一、舊本今昔十、同廿、同廿八、古叓談三に二處、續古
叓談五、古今著聞、十七に六處、發心集二、同八に二
處、十訓抄一、砂石集五、上、同八に三處、聖財集中、壒

嚢抄、八、百練抄、五、三國傳記、三、同九、同十一ノ二處、同十二、神道集、八、同十、宗長手記、上、未來記、草子、田村、草子、上、保元物語、上、平治物語、下、平家物語、四、同五、長門本平家、八ノ二處、同十一、同十二、源平盛衰記、三ノ二處、同四、同八ノ二處、同十、同十三、同廿六ノ三處、同廿八、太平記、二、同五、同七、同十八、同廿一、同廿五ノ二處、同廿六、同廿九、同卅、應仁畧記、下、鐮倉大草紙、下、文正記ノ二處、真言傳、四、同五、同七、地藏靈驗記、八、神明鏡、下ノ四處、吉野拾遺ノ三處、此外所見枚擧ノ遑なけれど、あまりにふれたればさびつし、

おろ〳〵記臆せし一は、天狗の王（ワウ）、舊本今昔十　大天狗（ダイテング）吾妻
二つ三つ引出つるなり、
鏡、五、源平盛衰記、八、太平記、十八、應仁略記、下、未來記、草子、御曹子島渡、草子、胡蝶、草子、鞍馬天狗、謡詞、